

今を読む



長崎大 熱帯医学研究所教授 山本 太郎

64年、竹原市生まれ。長崎大医学部卒。外務省国際協力局長補佐などを経、07年から現職。専門は国際保健学。著書に「新型インフルエンザ」「ハイチ いのちの闘い」など。

ている。家々は鉄筋の建物を除いて根こそぎ破壊され、大量の木材の塊となっていた。町が消滅したという言葉も大げさなものではなかった。そんな景が三陸特有のリアス式海岸の入り江にだけ見られた。私たちが支援に入った左組町には約5千人が暮らす力所大きな避難所があった。約400人が避難生活を送る野営道場もの一つで、私たちの活動場所になった。避難所は地元の関係が自らも被災しながら診療を続ける。私たちが活動を始めると、連日100人もの人たちが受診を希望してきた。多くの人が肩の不調や風邪の症状を訴える。若い人にはインフルエンザの疑いがあり、高齢者には胃腸炎が多々みられた。タミフルやリレンザなどの抗インフルエンザ薬は底をついていた。私にはかかりつけの医療機関や薬をたずねる戸惑う慢性疾患の住民を診たり、相談に乗ったりした。

また、宮城県釜石病院では旧病棟が被害を受け、余震に備え入院患者の移送が必要となっていた。だが、病院関係者は「燃料不足感やに任せない」と語っていた。社会インフラが崩壊し、従来の医療体制が機能を発揮できない中、地域の医療を受け、再生するための支援・復興は現場にとまらぬ。まさに「総力戦」だと思ふ。

ハイチでも東でも、人々は被害を蒙り受け止めているように思ふ。これは私たちに課された未来への約束だ。しかし、それは深い悲しみの裏面でもあや考える。

私たちのできる復興支援

の後は長崎大緊急医療支援班として岩手県遠野市に拠点を設けた。私はこの時、知人にこんなメールを送った。「被災地に入り、3日目の車家の壁には赤いハンキでX印。内部は既に確認済」といふ印だ。消防署や自衛隊、さらには米海軍支援隊の国際緊急援助隊が、金半額は壊れて静かでした」

3月11日後、長崎から出張で東京都内にいた私の居元が、大きな2度揺れたが、思ひこ、書棚に揺まれた本が首をたて落した。千代田区神田神保町の書店の店先のラジオが地震発生を知らせる。首圓では列車の進行がすべて停止し、徒歩で自宅を目指す人、その後の東京は埋め尽くされた。大変なことが起きている。そんな気がした。20を覚えている。その予感に帰した杉並区の自宅でテレビを見た時から、現勢のものとなった。東北地方太平洋沿岸の町を津波が襲った後が繰り返され、緊急支援が必要であることは明らかだった。

子らの未来 構想へ道筋を

医師の自分でききこえない。震災から30日目の13日、中米ハイチのコレラ流行の折、ともに医療

返してはいないかと思つた。避難所では朝日に卒園式を迎えるほどだったが、子どもたちが、私の傍らで遊んでいた。卒園式はなかったが、子どもたちは未来がある。私たちにきくとは何だろうか。東京の友人の一人は、被災者がやがて音楽を必要とする日のために、今は時間を惜しんでハイオリンを練習しているという。友人は20歳の時、それまで弱視だった視力を失った。自分を支えてくれたのは、感で始めたハイオリンと音楽だった。

私たちが日常の生活を大切にしよう被災地を思う。そのうえで支援を行つて、必要な支援は現場のニーズに沿った支援であると同時に、子どもたちの未来が構想できる復興への道筋を考えることであると思ふ。これは私たちに課された未来への約束だ。しかし、それは深い悲しみの裏面でもあや考える。